

第27回図書館総合展フォーラム(丸善雄松堂)
AIによる近未来の図書館サービス
—研究と実践の接点から考える、その可能性と課題—

図書館だからすべきこと／できることを考える
—AIの活用に関する共同研究の経験を中心に—

2025年10月24日(金)

のずえ としひこ
野末 俊比古(青山学院大学)
tnozue@ephs.aoyama.ac.jp

0

はじめに

1

自己紹介 - 野末 俊比古(のずえ・としひこ)

- ・ 現職……青山学院大学教育人間科学部教授・学部長、
同大学革新技術と社会共創研究所副所長
- ・ 職歴……学術情報センター助手、文部省社会教育官、
青山学院大学文学部准教授、国立情報学研究所客員准教授 など
- ・ 社会活動……日本図書館協会図書館利用教育委員会委員長、
国立国会図書館科学技術情報整備審議会基本方針検討部会長、
東京都立図書館協議会議長、神奈川県立図書館アドバイザー、
図書館総合展運営委員、知的資源イニシアティブ理事 など
- ・ 専門分野……図書館情報学、教育情報学 など
- ・ 関心領域……情報リテラシー教育、学習資源(教材)開発、
「AIと図書館」 など

2

発表(話題提供)の概要

- ・ 趣旨……「AIを活用した図書館サービス」をめぐる共同研究の
経過・成果と“近未来”に向けた想い・考え(私論を含む)
- ・ 想定……AI(をはじめとするICT)は“道具”ではなく“環境”
- ・ 構成……配付資料(レジュメ)のとおり
- ・ 資料……スライド(PDF)は配付資料のQRコードから
- ・ その他……ご質問・ご意見は「イマキク」から



3

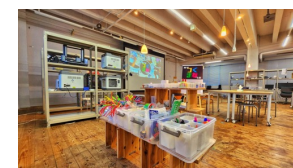
青山学院大学革新技術と社会共創研究所と 「近未来の図書館と新しい学び」研究プロジェクト

4

青山学院大学革新技術と社会共創研究所

- ・ 2021年開設（前身のシンギュラリティ研究所は2018年開設）
- ・ AI/DXの時代（テクノロジーの活用）における人間・社会の在り方について学際的に研究（教育的活動も展開）
- ・ 学内の専任教員と学外の研究者（客員）から構成
- ・ 外部資金（企業協賛）にて運営
- ・ 複数のプロジェクトが進行
 - ・ AI・ロボットと倫理
 - ・ 共創型デジタルマッピング
 - ・ 青学つくまなラボ
 - ・ 近未来の図書館と新しい学び など

青学つくまなラボ（旧）



5

「近未来の図書館と新しい学び」研究プロジェクト

- ・ AI/DX時代における“教育（学習）”と“図書館”の在り方についてテクノロジー（ICT）の活用を中心に実践的・協働的に研究
- ・ “コロナ前”の活動例（2018年～）
 - ・ 産学連携・共有型教材データベースの構築
 - ・ オンライン・協働型学習空間の構築 など
- ・ 富士通 Japan との共同研究（2019年～）
 - ・ 履歴などを活用した文献探索システムの検討
 - ・ AIを活用した文献探索システムの開発 など
- ・ その他の取組み（2024年～）
 - ・ 司書課程・図書館（職員）研修向け映像教材（DVD）の制作（右図） など

『シリーズ 図書館のビジョン』（DVD）



6

AIを活用した文献探索システム

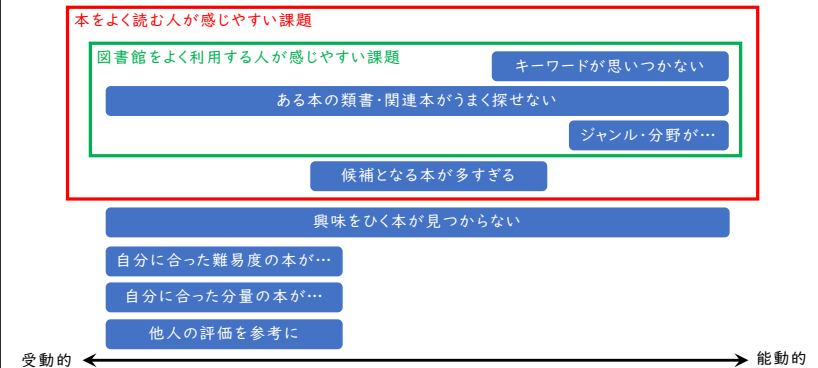
7

AIを活用した文献(蔵書)探索システム

- ・ 富士通 Japan との共同研究において「テクノロジーを活用した学習者に最適化した次世代型図書館(サービス)のモデル構築」を追究
- ・ (学習資源としての)「文献」(電子書籍等を含む)に着目、従来の検索では見つけにくい文献(情報)に“**出会う**”ために **AI を利用**
- ・ 仮説に基づき、質問紙調査でニーズを確認しつつ、実験を繰り返しながらシステムを試作・開発
- ・ 図書館分野の特性を踏まえて汎用性の高さを重視
- ・ 昨年1月から社会実装(日本初、メディアでも着目、横浜市が最初)、現在、公共図書館10館(自治体)、大学図書館1館(大学)に導入(8月末時点)
- ・ 課題の把握・分析とシステムの改良を継続中

8

文献探索・選択における課題(ニーズ)と解決策(質問紙調査)



9

AIをめぐるいくつかの視点

10

AIを活用したシステムの研究を通して

- ・ AI にも“得意”“不得意”
→ 後者には既存技術の併用が効果
- ・ AI は“パートナー”
→ 人間(図書館員)は信頼性(責任)の担保
- ・ AI は万能型でなく特化型
→ 利用者(ニーズ・スタイルなど)の把握・分析が重要・必須
- ・ “技術(テクノロジー)を追う”から“社会(テクノロジー)を創る／選ぶ”へ
→ “学び”のコーディネートなどを強化

11

図書館におけるAI活用の方向性

12

AIの活用に向けて

- ・ 図書館の“潜在的”利用者にアプローチ
 - ・ AI探索は“図書館にいかない”“本を読まない”層にウケがいい
 - ・ 図書館（文献）への“入口”をさまざまなところに
 - ・ 情報リテラシー（情意面を含む）の“ハードル”をできるだけ下げる
- ・ 文献を“学習資源”にとらえ、探索・利用の最適化（効果・効率）を
 - ・ “検索”から“探索”へ（使い分け・組合せ）
 - ・ AI以外のテクノロジーも利用（例えば履歴などの活用）
 - ・ 目的・対象などに応じた“学習プログラム”を構築（コーディネート）
- ・ 四つの“学習資源”を拡充・活用
 - ・ 複合的・連動的に利用
 - ・ AIを含むテクノロジー（ICT）と（利用者を含む）協働による“拡張”
 - ・ 学びのプロセスをトータルに支援

13

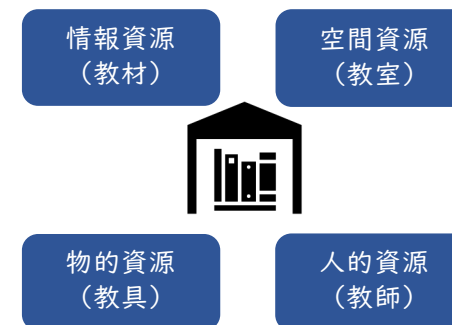
“図書館DX”をめざして

定義	ポイント
図書館が… データとデジタル技術を活用して	データ・技術の 組合せ
利用者や社会のニーズを基に	ニーズ志向
“製品”やサービス、ビジネスモデルを 変革するとともに	個別最適化
業務そのものや、組織、プロセス、図書館文化・ 風土を変革し… 優位性を確保すること	全体最適化

（経産省（2022）「デジタルガバナンス・コード2.0」を一部修正）

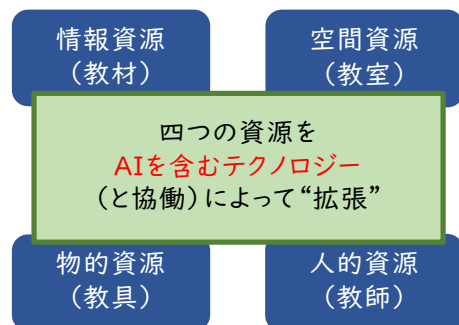
14

【参考】図書館における四つの資源とその“拡張”



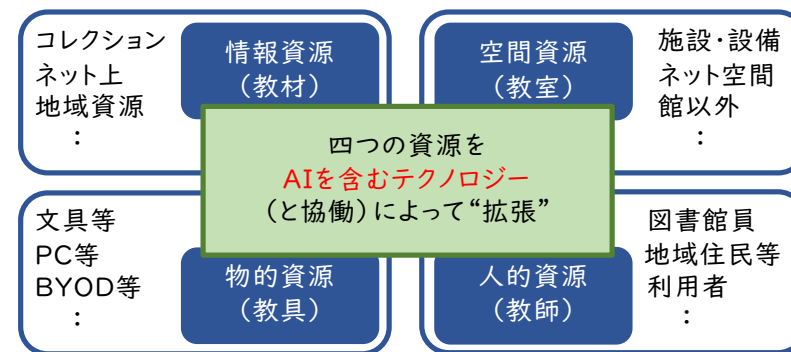
15

【参考】図書館における四つの資源とその“拡張”



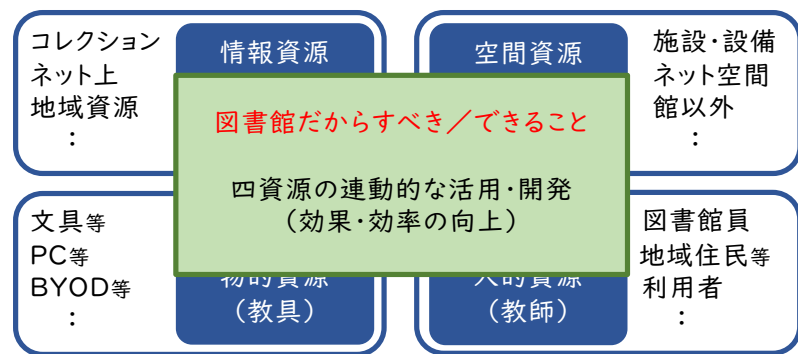
16

【参考】図書館における四つの資源とその“拡張”



17

【参考】図書館における四つの資源とその“拡張”



18

AIの活用に向けて

- ・ 図書館の“潜在的”利用者にアプローチ
 - ・ AI探索は“図書館にいかない”“本を読まない”層にウケがいい
 - ・ 図書館(文献)への“入口”をさまざまなところに
 - ・ 情報リテラシー(情意面を含む)の“ハードル”をできるだけ下げる
- ・ 文献を“学習資源”にとらえ、探索・利用の最適化(効果・効率)を
 - ・ “検索”から“探索”へ(使い分け・組合せ)
 - ・ AI以外のテクノロジーも利用(例えば履歴などの活用)
 - ・ 目的・対象などに応じた“学習プログラム”を構築(コーディネート)
- ・ 四つの“学習資源”を拡充・活用
 - ・ 複合的・連動的に利用
 - ・ AIを含むテクノロジー(ICT)と(利用者を含む)協働による“拡張”
 - ・ 学びのプロセスをトータルに支援

19

おわりに

20

“図書館観”“利用者観”の更新へ

- ・ “点”としての利用者 → “線”としての利用者
(学び手(成長する個人)としての図書館利用者)
- ・ 顕在的利用者(≒来館者)に焦点
→ 潜在的利用者(≒非来館者)に(も)アプローチ
- ・ 社会・時代(技術など)に応じて在り方(サービス)を探る
→ どのように社会・時代(技術など)を創るか
- ・ 計画を立てて実行(PDCA) → “考えながら走る”
- ・ 評価はアウトプットに着目 → アウトカムを(も)見据えて
- 知見・経験の集約・再構築(一緒に考えて／つくっていきましょう!)

21

“図書館観”“利用者観”の更新へ

- ・ “点”としての利用者 → “線”としての利用者
(学び手(成長する個人)としての図書館利用者)
- ・ 顕在的利用者(≒来館者)に焦点
→ 潜在的利用者(≒非来館者)に(も)アプローチ
- ・ 社会・時代(技術など)に応じて在り方(サービス)を探る
→ どのように社会・時代(技術など)を創るか
- ・ 計画を立てて実行(PDCA) → “考えながら走る”
- ・ 評価はアウトプットに着目 → アウトカムを(も)見据えて
- 知見・経験の集約・再構築(一緒に考えて／つくっていきましょう!)

22

ありがとうございました

- ・ ヒント・材料がひとつでもあったなら幸いです
つづきはこのあとのディスカッションにて
- ・ ご意見・ご質問・ご感想をいつでも歓迎します
Email: tnozue@ephs.aoyama.ac.jp
Facebook: toshihiko.nozue
- ・ 関連する教材です
『シリーズ 図書館のビジョン』(DVD, 日外アソシエーツ, 2025.1-)
『学びの達人』(DVD, 丸善出版, 2026.1 予定)
- ・ 本発表の一部には登壇者によるこれまでの講演・学会発表などを
再編集したものが含まれます

23